

ロプシャイト英華字典の訳語の来源をめぐって

——地理学用語を中心に——

荒川 清 秀

〇 はじめに

森岡1969は、明治初期日本人が英和辞書を編纂したり西洋の書物を翻訳する際ロプシャイトの英華字典（1866-69）をどれほど利用したかについての先駆的研究である¹⁾。森岡によれば、『附音挿図 英和字彙』（明6・1873）や当時の専門術語集において、数学、キリスト教、政治・法律、天文・地理用語では中国訳の影響を大きく受けているが、医学・薬学用語、文法、鉱物、軍隊用語ではほとんどなく、化学、物理、生物学ではごく一部をとりいれたにすぎないという²⁾。一方、永嶋大典も同じころ、『附音挿図 英和字彙』にロプシャイト字典の影響が出ていることに気づいていたが、キリスト教用語をのぞき、のちに残った訳語がそれほど多くはないということから、森岡の結論は「『英華字典』の功績を少し大きく見積もりすぎている」と述べた³⁾。森岡の研究から10年後、「病院」の出自をめぐる論争を契機に中国洋学書の研究にとりくんだ佐藤亨は、森岡の研究に一定の評価をあたえつつ、つぎのように指摘した⁴⁾。

ただ、『英華字典』等の語彙が、いかなる素性のものか、いかなる経路を辿って字典に反映したものが明かでなければ、右の研究は十全を期しがたいと考える。私の見るところでは、新造語も多い反面、中国初期洋学書に用いられている語も多く、その点では二つの観点からの考察が必要となる。

前半についてはまさにそのとおりである。ただ、ロプシャイトに新造語が多いかどうか、また、その訳語が初期洋学書からどういう経路を経てロプシャイトに流入しているかは、よりつつこんだ検討が必要である。そもそも、ロプシャイトの字典は中国の洋学史において、

どのような位置を占めているのか。沈国威1994は、中国近代語彙史におけるロブシャイトの訳語の位置を問題にし、当時実際に各分野で使われていたにもかかわらず、ロブシャイトの英華字典に採用されなかった語として「化学」をとりあげ、ロブシャイトの習得語彙量の問題と登録語の選定基準の範囲を問題にし、

外国人の場合は語彙の分野に偏りがあつたり、或いは理解できても、訳語として使用することができなかつたりすることがありうる、また、宗派による用語の違いも考えられよう、

と述べた⁵⁾。ロブシャイトがなぜ「化学」という語を採用しなかつたか、かれは「化学」という語を本当に知らなかつたかについてはあとでふれるが、中国近代語彙史において、ロブシャイト字典がどのような位置を占めているかについても定まった評価があるわけではない。本稿では、ロブシャイト字典に採録された地理学用語の来源の追究を通し、日中近代訳語(學術用語)の形成と交流の歴史における同字典の位置を考えてみたい。

1 問題の発端——ロブシャイトの「熱帯」はどこからきたか

森岡の主張は、ロブシャイトの字典が近代日本の訳語にいかに関与をあたえたかということであったが、筆者は荒川1987において、従来日本製漢語とされていた「熱帯」が中国製漢語であることの根拠としてこの字典を利用した。これは当然ながら、ロブシャイトが日本語からの影響をまったく受けなかつたという前提に立っている。その当否はあとで検討することにするが、ともかくロブシャイトの字典には「熱帯」が以下のように出ていたのである。

the tropics 熱帯 the torrid zone 熱帯

つぎの課題は佐藤亨も言うように、「熱帯」を含むロブシャイトの訳語がどこからきているかということであった。

従来日本の国語学では、19世紀初頭以降に來華したプロテスタント宣教師たちの著作(後期洋学書)については、和刻本の普及ということもあって注目する研究者もいたが、16世紀末以降に來華したイエズス会宣教師たちの著作(初期洋学書)については、もともと舶來された数に限りがあり、しかもその大半が禁書となり、一部は写本として流布したものの、一部の研究者をのぞけばほとんど等閑視された状態であった⁶⁾。それが注目されはじめたのは、80年代に国語学界で「病院」の出自をめぐる論争があつてからのことである。すなわち、「病院」はもともと蘭学者の造語であると考えられていたのが、初期洋学書の一つである『職方外紀』(1623)にあることがつきとめられ⁷⁾、筆者がさがしもとめていた「熱帯」もそこにあることが佐藤1980によって先に指摘されていたのである。しかし、筆者はさらに遡れると考え、その萌芽がマテオ・リッチの『坤輿万国全図』(1602)にあることをつきとめた。すなわち、

其地甚熱，帶近日輪故也，	→ 熱帶
此二処地居甚冷，帶遠日輪故也	→ 冷帶（冷=寒）
此二地皆謂之正帶	正帶（=温帶）

のような過程を経て「熱帶」や「冷帶」ができたと考えたのである⁸⁾。

荒川1987では以上から、ロプシャイトの「熱帶」はリッチからきているということで問題を解決したような気になってしまった。しかし、のちに19世紀のロバート・モリソン来華以後の中国「洋学書」を調査したところ、つぎのように、ある時期まで「熱帶」を含む五帯の名称はゆれていることがわかった⁹⁾。

ウイリアムス 『英華韻府歴階』 (1844)	熱道 温道 寒道
マーケス 『地理備考』 (1847)	熱道 温道 寒道
ミュアヘッド 『地理全志』 (1854)	熱道 温道 寒道
ホブソン 『博物新編』 (1855)	熱道 温道 冷道
ウェイ 『地球説略』 (1856)	熱道 温道 寒道
レグ 『智環啓蒙』 (1856)	熱帶 温帶 寒帶
ワイリー 『六合叢談』 (1857)	熱帶 温帶 寒帶（「地理」ミュアヘッド）
ワイリー 『談天』 (1859)	熱帶 温帶 寒帶
ブリッジマン 『大美聯邦志略』 (1861)	熱帶 温帶 寒帶
ロプシャイト英華字典 (1866-69)	熱帶 温帶 寒帶

ロプシャイトの「熱帶」使用は、レグ以降の訳語の交替を承けたものである。レグ以後なぜ訳語が交替したかについての詮索は今おくと¹⁰⁾、注目すべきは、同じミュアヘッドの著になる『地理全志』と『六合叢談』に連載した「地理」の間で訳語が大きく交替していることである¹¹⁾。すなわち、

『地理全志』 (1853-54)	『六合叢談』 「地理」 (1857)
熱道 温道 寒道	→ 熱帶 温帶 寒帶
北帶 南帶	→ 昼長圈 昼短圈
北寒線 南寒線	→ 北極圈 南極圈

後者はリッチ、アレニら初期洋学書の用語を復活させたものといえる。

用語に交替が起こったのはミュアヘッドにおいてではなかった。先にロプシャイトについてみた、「the tropics 熱帶 the torrid zone 熱帶」というのは、実は最後に刊行された part IV (1869)にあるもので、のちに全書を通覧したところ、part I (1866)の climate の項や他の箇所にはつぎのように「熱道」系の用語が出ていた。

part I (1866)	climate ... ; a zone	道帶
---------------	----------------------	----

	the hot zone or climate	熱道 熱地
	the temperate zone or climate	温道 温涼水土
	the cold zone or climate	寒道 寒地 冷地
part I (1866)	the frigid zone	氷道
part II (1867)	extra-tropical	熱道之外

ロブシャイト字典の中においても訳語は交替していたのである¹²⁾。

・ レッグやミュアヘッドが「熱道」系から「熱帯」系に訳語を交替させたのは1856年以後のことであり、ロブシャイトがそれを自己の辞書に反映させるまでに10年を要しているが、ロブシャイトがこうした当時の中国洋学界における訳語の状況、変化に関心をほらっていたことがみてとれる。以下、ロブシャイト字典の地理学用語の来源をさぐるために、ロブシャイトに先行する辞書、さらに後期洋学書との関係をみてみたい。

2 ロブシャイト字典の訳語と先行辞書・洋学書との関係

2.1 先行辞書との関係

辞書の編者にとって、真っ先に利用する資料は、なんといっても先行する辞書であろう。ロブシャイトは字典の序文の終わりのところに、中国語を記述する上で参考にした辞書、文法書を23種あげている。そのうち、英語と mandarin (官話) との対応辞書としては、モリソン『中国語辞典』(1815-23)「英華」の部(1822)、ウイリアムス『英華韻府階階』(1844)、メドハースト『英華辞典』(1847-48)があがっている。以下の表は、主な地理学用語について、上記各辞書の用語を対照させたものである。左端の語は日本語、下線を引いたものはモリソン以前の中国洋学書にすでに現れているものを示す¹³⁾。なお、ここでは天文学用語も一部入っている。

	モリソン	ウイリアムス	メドハースト	ロブシャイト
<u>天球</u>	○			○
<u>恒星</u>	経星 ○	経星 ○	経星 ○	定星 ○ 経星
惑星			行星	行星
衛星			従球 小星	陪星 陪球
			従星 月	従星
軌道				○
<u>地球</u>	○	○	○	○
<u>半球</u>	○	○	○	○
<u>赤道</u>	○	○	○	○
			地球中帯	地球中線

	モリソン	ウイリアムス	メドハースト	ロプシャイト
	中帯		中線 中帯	昼夜平分線 中線 中帯
<u>南極</u>	○		○	○
<u>南極圈</u>				極図線 南北寒道
<u>北極</u>	○	○	○	○
<u>北極圈</u>				極図線 南北寒道
北回帰線	北帯	北帯	北帯	熱帯北限
	北道 北陸		北道 夏至道	夏至道
南回帰線	南帯		南帯	熱帯南限
	南道		南道 冬至道	冬至道
<u>地平線</u>	○ 地平圈		○	○
<u>子午線</u>	子線	子線	子線	正午線 午線
	子午圈		子午圈	子午圈
<u>経線</u>	○	○	経 偏度	○
<u>緯線</u>	○	○	○	○
<u>緯度</u>	○			○
<u>経度</u>				○
大陸		大州	大原 広地 洲	洲
島	海島 洲	海島 洲	海島 洲	海島 洲
<u>海峡</u>	澗 津口	峡口 津口	窄海 狭海	○ 海狭
湾	○ 海隅	海湾	○ 海隅	○ 後海 海股 海隅
岬		海角	岬 岬頭	岬
			山頭 地首	山頭 山嘴
半島			連地之島	○ 連洲之地 [島]
地峡			腰	腰 土腰
太平洋			平洋	平洋 大平洋
<u>氷山</u>			○	○
氷河				氷田 山上氷田
<u>大洋</u>	洋 ○		○	洋 ○
	洋海	洋海	洋海	洋海
<u>航海</u>	漂洋	漂洋	○ 浮海	○
<u>気候</u>			○	○
	地気	地気	地気	地気
	土気		水土 風土	水土 風土

	モリソン	ウイリアムス	メドハースト	ロブシャイト
天気	○	○	○	○
貿易風				熱帯常風
平地	○		○	○
平原			○	○
谷	山谷 ○	山谷	山谷	○ 山谷
山脈				山嶺
地震	○	○	○ 地動 地 岨	○ 地動 地炭
温泉	○		○	○
火山	○	○	熒臺	熒臺 ○
溶岩		温石		温石
地図		○	○	○

このうち、ロブシャイトの用語で、

(1) モリソンにすでに出ているもの

恒星 経星 地球 半球 赤道 中帯 南極 北極 地平線 子午圈
 経線 緯線 緯度 海島 洲 湾 海隅 大洋 洋 洋海
 地気 天気 平地 山谷 谷 地震 温泉

(2) ウイリアムス以後現れるもの

火山 温泉 地図

(3) メドハースト以後現れるもの

行星 中線 夏至道 冬至道 洲 岬 山頭 腰 平洋 氷山 航海
 気候 水土 風土 地動 地及 熒臺

と、モリソンから来ているものが多いが、その大部分が初期洋学書に出典をもつものであることを考えると、メドハーストの影響の方をむしろ重視すべきであろう¹⁴⁾。

2・2 先行洋学書との関係

さて以下にあげる表は、ロブシャイト以前の辞書には採録されなかったものの、洋学書には出てくるものである。以下、表では略称を示し、●は辞書を示す。なお、辞書と地理書の関係をみるため、「行星」のように、一部辞書にもあった語も出している。

	モ	ウ	備	メ	全	博	説	智	六	聯	問	ロ	ド
定星					○				○			●	
行星				●	○	○			○			●	●

	モ	ウ	備	メ	全	博	説	智	六	聯	問	ロ	ド
軌道					○	○			○			●	
午線			○		○							●	
経度								○				●	
海峡			○		○		○		○			●	
海股											○	●	●
土腰											○	●	●
山嶺					○							●	
氷田					○							●	
気候			○	●	○		○	○				●	
貿易風					○	△			○				●
熱帯常風												●	
信風					○								
太平洋					○	—海	○			○		△	

モ：モリソン中国語辞典 英華の部 (1822), ウ：ウイリアムス英華韻府歴階 (1844), 備：『地理備考』(1847), メ：メドハースト英華辞典 (1847-48), 全：『地理全志』(1853-54), 博：『博物新編』(1855), 説：『地球説略』(1856), 智：『智環啓蒙』(1856), 六：『六合叢談』(1857), 聯：『聯邦志略』(1862), 問：『地理問答条略』(1865), ロ：ロブシャイト英華字典 (1866-69), ド：ドーリトル『英華萃林韻府』(1872)

先行する洋学書のうち、とりわけ影響の強いのはミュアヘッドの『地理全志』で、ロブシャイトは以下の語を『地理全志』からとったと考えられる¹⁵⁾。

定星〈恒星〉 軌道 午線 海峡 山嶺 氷田〈氷河〉 大平洋

〈南北極圏〉の「極図線 南北寒道」のうち「南北寒道」も『地理全志』の「北寒線」「南寒線」を受けたものであろう。「太平洋」についていうと、ロブシャイトの英華字典の方には、

pacific 平洋 ocean (the Pacific Ocean) 大平洋

だけが出ていて、「太平洋」となるのは華英字典 (1871) においてである。もっとも「大」は「太」と通用するのだが¹⁶⁾。

海股〈湾〉 土腰〈地峡〉

のような語は、『地理問答』だけでなく福沢諭吉が振りがなをつけた子卿の『増訂華英通語』(1860, 原本序は1855) にもみえ、当時の中国人の間で通用した訳語であったのだろう。これらはのちに日本語に駆逐されるまで中国洋学書で用いられた¹⁷⁾。

〈回帰線〉の意味の「熱帯北限」「熱帯南限」はロブシャイトの造語と考えられるが、この語はドーリトルの『英華萃林韻府』(1872) の part I や商務印書館『華英音韻字典集成』(1902) にあげられただけで後世にはほとんど影響をあたえなかった。〈回帰線〉にあたるドイツ語

は Wendekreis, Wende は「ターン」、kreis は「円」、したがって、ドイツ語からの直訳とも思われない¹⁸⁾。「熱帯常風」についてはあとでも述べるが、これもロプシャイトの造語である。

ところで残りの語のうち、「半島」はロプシャイトに先行する日本側資料、文久2年(1862)の堀達之助『英和对訳袖珍辞書』に現れる。これをつぎに検討しよう。

3 初期・後期洋学書にないもの

3・1 ロプシャイトの「半島」はどこから来たか

ロプシャイトの〈半島〉の訳語はメドハーストの影響を受けている。

peninsula

メドハースト 連地之島 有頸之洲 水流未周之巽

ロプシャイト 連洲之地 連洲之島 半島 水不全周之島

そしてこの中では「半島」だけが異質に見える。しかも、それが文久2年(1862)に刊行された日本の辞書にも出ているということはどういうことか。森岡1969, p. 42によれば、堀の辞書の訳語の6割強は蘭学の伝統からきているという。はたして、佐藤1983, p. 248によれば、「半島」は江戸の地理学者、山村才助の『訂正増訳采覧異言』(1802ごろ)に現れるという。佐藤には該当箇所を引いていないので、青史社影印本でその箇所をさがしてみると、デンマークのエトランド半島についてふれたところに「半島」が出てくる。

和蘭語ニ法兒弗厄乙蘭土(ハルフ・エイランド)ト云コレ半島ト云ル義ニシテ三面海ニ臨ミ一面大陸ニ連ナルノ地ヲ称スルノ言ナリ (巻2-12ウ)

以下、『袖珍辞書』までの流れをあげておこう。

□ 青地林宗『輿地志』首巻(1827)

陸地ノ一端海ニツキ出三面水ニ囲ルヲ半島トシ……

□ 小関三英『新撰地誌』・渡辺崋山『新釈輿地図説』(天保9・1836)

[シキールエイランド] 半島は三方海を環シ一方[ハストランド]に接する地を云

□ 桂川甫周『和蘭字彙』(安政2-5・1855-58)

eiland Den half eiland. schiereiland 半嶋 三方ニ海ヲウケタル国

half eiland 半嶋 三方ニ海ヲ請テ居ル国

「半島」が蘭学の伝統の中で継承されてきたことは明かである¹⁹⁾。ではこの語がロプシャイト字典にもあるのはなぜか。両者が別々に同じ語を偶然つくったのか。あるいは、ロプシャイトがこうした蘭学資料のどれかを偶然目にし採用したのか。もし、両者が期せずして同じものをつくったとしたら、これは訳語研究史上興味ある例となるし、かりに後者の推理が正しいとすれば、ロプシャイトの訳語の来源を再検討しなければならなくなる。

筆者は最初ロブシャイトは独自にこの語をつくったと考え、1996年12月に愛知大学で開かれた第3回近代中国語研究会の席においてこのことを報告した。なぜなら、ロブシャイトの母語であるドイツ語でも〈半島〉は Halbinsel (半分の島) というからである。ところが、ロブシャイトの字典と堀の辞書に「半島」があることは那須雅之も同じころ気づいていて、同じ会で那須は、ロブシャイトがペリーにともなって1854年に訪日した際、アメリカ側通訳として日本側通訳である堀達之助と接触し(1855年2月)、堀にメドハーストの英漢辞書を送ったこと、また1862年に再来日したときには堀の『英和对訳袖珍辞書』を購入した可能性があることを報告した。その後那須は、もともとその所在が知られていたアメリカの Lehigh 大学に赴き、ロブシャイトの自筆書き入れのある『英和对訳袖珍辞書』を確認したという²⁰⁾。したがって、ロブシャイトが堀の辞書をもっていたことは明かであり、今後ある訳語がロブシャイトにあるからといって、ただちに中国製漢語とはいえなくなってきた。しかし、だからといって、「ロブシャイトの〈英華字典〉を近代日本語における訳語成立の資料として扱った研究論文はおそらく抜本的再考を免れない」(那須上記研究会レジメ)かどうかは、那須のいうように、ロブシャイトの訳語と堀の訳語の全面的な対照がなされないかぎり簡単にはいえない。また、かりにそのような影響があったとしても、堀の辞書がその後の中国洋学史にまで影響をあたえているかどうかは、中国洋学史におけるロブシャイト字典の位置について検討するまでなんともいえない。ともかく、ここではロブシャイト字典に対する堀の辞書の影響を、両者の地理学用語の対比を通して試してみたい。

3・2 ロブシャイトと堀の訳語

以下は主な地理学用語について両者の訳語を対照したものである。下線は両者にあるものの、メドハーストあるいはそれ以前にすでに存在したもの、◎は両者にのみ存在するものを示す。

	〈ロブシャイト〉	〈堀達之助〉
antarctic pole	南極	南極
archipelago	群島	多島海
arctic pole	北極	北極
avalanche	◎雪崩	雪崩
beach	海辺 海岸 海瀨 海濱 海涯 海旁	濱 海岸 堤 渚
breeze	微風 柔風 輕風	軟風
cape	山頭 山嘴 岬	外套ノ襟又岬
channel	海峡 窄海 (大英) 海腰	海峡 溝 川 浅瀨中ノ深ミ

	〈ロプシャイト〉	〈堀達之助〉
climate	水 土 地 氣 天 氣 風 土 風 氣 氣 候	氣 帶 氣 候
coast	海 辺 海 旁 海 濱 海 岸	海 辺 濱 海 岸
continent	洲	陸 地 大 原 洲
desert	荒 野 沙 漠	荒 地 沙 漠 功
equater	赤 道 地 球 中 線	赤 道
equinoctial	◎ 昼 夜 平 分 線	昼 夜 平 分 線
glacier	氷 田 山 上 氷 田	氷 山
hemisphere	半 球	半 球
horizon	天 涯 眼 界 天 涯 天 辺 天 際	地 平
isthmus	腰 土 腰	地 峡
latitude	広 緯 度 緯 線	広 ガリ 幅 緯 度
lava	温 石 熒 臺 所 出 之 石	噴 火 山 ヨリ 出 ル 石 ノ 類
longitude	經 度 經 線	長 サ 經 度
map	図 地 図	地 図
meridian	正 午 線 正 午 度 午 線 經 度 經 線 子 午 圈	日 中 午 時 子 午 線 最 頂 天
monsoon	時 風	定 り 風
ocean	洋 大 洋 洋 海	大 洋
orbit	躡 次 躡 道 軌 軌 道	曜 星 惑 ノ 運 轉 ス ル 圈 小 円 体
oxygen	養 氣	酸 素
parallel	平 行 之 線 緯 線	平 行 線
peninsula	連 洲 之 地 連 洲 之 島 ◎ 半 島 水 不 全 周 之 島	半 島
plain	平 地 平 原 原 坦	平 地 平 野 戰 場
planet	行 星	惑 星
ridge	山 脊 岡 崗 嶺	山 脊 高 サ 巔
satellite	陪 星 陪 球 從 星	衛 星 (孛 星)
sea breeze	海 風 海 氣	海 風
strait	海 峡 海 狹	直 ナ ル 狹 キ 六 ケ 數 キ
trade-wind	熱 帶 常 風	定 り ノ 風 (時 ト 所 ニ ヨ リ テ)
volcano	熒 臺 火 山	火 山

「南極」「北極」「赤道」「半球」等両者で用語が一致するものの多くはロプシャイト以前に存在しているものであり、那須が前述の研究会で「半島」とともにあげた「海峡」も、実は3でみたようにロプシャイトに先行する洋学書にすでに出ていた。のちに日中共通になる「氷山」「地峡」「衛星」についてはロプシャイトは関心をはらっていない。これはむしろかれが先行する洋学書の影響をより強く受けていたことをものがたるもので、「半島」が採用されたのは、この語の語構造がまさにドイツ語のそれに一致していたからである²¹⁾。

4 ロプシャイト字典の訳語の位置づけ

地理学用語を中心にではあるが、最後に日中近代語彙史におけるロプシャイト字典の訳語の位置についてまとめておきたい。

(1) 「熱帯」の例でみたように、ロプシャイトは初期洋学書の語彙を、むしろ先行する後期洋学書を通して学んだ。したがって、日本語におけるロプシャイトの訳語の影響も、専門用語については、これに先行する後期洋学書(とりわけそれらの和刻本)との関係で考えてみる必要がある²²⁾。

(2) 3・2でみたように、堀の辞書の影響は大きくないとはいえ、「ロプシャイトに出ていれば中国製漢語」という前提は一応疑ってかからなくてはならなくなった。ロプシャイトの訳語は先行辞書の影響、とりわけメドハーストの影響を強く受けているが、遠藤1995によれば、堀達之助もメドハーストの辞書の影響を受けているから、ロプシャイトの訳語が堀の訳語と一致している場合も、メドハーストまでさかのぼって検討する必要がある。

(3) 「腰／土腰〈地峡〉」や「海腰〈海峡〉」それに「淡気〈炭素〉」「養気〈酸素〉」(以上二つは『博物新編』)「行星〈惑星〉」のように、ロプシャイトは当時の中国洋学書に使われていた訳語をかなり掌握していた。しかし一方で訳語を選択するのに、かれなりの基準もっていた。「半島」を選択したのはドイツ語の影響であることを先に述べたが、「貿易風」についても、かれが影響を受けた『地理全志』にすでに出ているにもかかわらず、かれはむしろ「熱帯常風」ということばをつくった²³⁾。それはドイツ語の *passat* が本来「貿易」や「交易」とはなんらつながりがなかったからである²⁴⁾。

もうひとつ例をあげよう。先に沈国威がロプシャイトの限界の例として、ロプシャイト字典における「化学」ということばの未使用を指摘していることをあげた。しかし、ロプシャイトは『漢英字典』(1871)の序文で、「化学」という語をわざわざあげ、この語は「中世の錬金術を連想させよくないからとらない」とまで明言しているのである²⁵⁾。八耳俊文によれば「化学」ということばは、1850年代後半、王韜やワイリー等上海宣教師グループによって物の質を変化させる「変化之学」として提起された名称だが²⁶⁾、ロプシャイトは、これを錬金術と結びつけた「分離と合成の学」としての古い〈化学〉と誤解していた可能性がある。

なんにしても、かれが意識的に訳語を選択していたという証拠にはなるであろう。

注

- 1) 原著は, W. Lobscheid: English and Chinese Dictionary, Part I-IV, 1866-69, Hongkong, the Daily Press Office. 東京美華書院から復刻版が出ている。
- 2) 森岡1969, p. 68-107.
- 3) 永嶋1970, p. 115.
- 4) 佐藤1983, p. 15.
- 5) 沈1994, p. 187.
- 6) 荒川1997, p. 27-29を参照。
- 7) この経過については荒川1997, p. 29-30を参照。
- 8) リッチの『乾坤体義』(1605)には,
其地甚熱, 則謂熱帶近日輪故也 此二処地俱甚冷, 即謂寒帶遠日輪故也
のように, 熟したかたちで「熱帯」「寒帯」が出ている。荒川1997, p. 44参照。
- 9) それぞれ中国原刊本を利用した。『英華韻府歷階』(1844)早稲田大学図書館, 『地理備考』(1847)東京都立中央図書館実藤文庫, 『地理全志』(1854)宮城県図書館, 『博物新編』(1855)関西大学図書館, 『地球説略』(1856)愛知大学図書館, 『智環啓蒙塾課初歩』(1856)英国図書館, 『六合叢談』(1857-8)英国図書館, 宮城県図書館, 『談天』(1859)愛知大学図書館, 『大美聯邦志略』(1862)国立公文書館内閣文庫
- 10) 荒川1997, p. 55では, 可能性の一つとして『海国図志』に引かれたリッチたちの著作の影響ということをあげた。1847年9月の *Chinese Repository* には『図志』の50巻本の book review が出ている。また, 注26)でも述べるが, レッグ以来ロンドン伝道会の宣教師の中国人ブレインであった王韜がかれら宣教師たちの訳語の創造にかかわっていた可能性も考えられる。
- 11) 「地理」は『六合叢談』巻1-1~8, 13, 2-2に連載された。「熱帯」等の用語が出てくるのは1-3である。
- 12) ロブシャイトは字典に先行する自著『地理新誌』(1855)の中でも, 「熱道 温道 冷道」(「人物略論」割り注)と「熱道」系の用語を使っている。なお本書はケンブリッジ大学蔵のもの(那須雅之氏からコピーをいただいた)。
- 13) 以下初期の出拠と考えられるものをあげる。
リッチ『坤輿万国全図』(1602): 天球, 地球, 半球, 赤道, 南極, 南極圏, 北極, 北極圏, 地平線, 子午線, 経線, 緯線, 緯度, 島, 『乾坤体義』(1605): 熱帯, 寒帯, アレニ 『職方外紀』(1602): 経度, 温帯, 熱帯, 海峡, 氷山, 大洋, 航海, 気候, 天気, 平地, 平原, 地震, 温泉, 火山, プノワ『地球図説』(1761): 恒星
- 14) ロブシャイトがメドハーストの影響を受けていることについては, 沈国威1994, p. 149にも言及がある。またロブシャイトの字書で, 時に他人の訳語であることを注記することがあるが, その中でもメドハーストからの引用はトップを占めている。以下, 該当する英語をあげる。
Medhurst – Capricorn, celery, clary, coriander, eruca, jalap, mastic, ornithology, pellitony, pulmonary, ragwort, segment すべてメドハーストの英華辞典を引いたもの。その大部分は植物名である。
Hobson – azote, nitorogen (淡気), eye, jalap, morplia, pancreas, symphysis, magnesia ホブソ

ンは宣教医でもあり、『全体新論』『西医略論』等中国語による医学書があることでも有名で、それを反映してか医学用語がめだつ。最初の「淡気」は『博物新編』（1855）に出るものである。

Bridgeman – carbonaceous, meteorology, perch

R. Morrison – botany, ornithology ロバート・モリソンで引かれているのはその中国語辞典の英華の部で、botany ではモリソンが引いた本草綱目の部類がすべて引かれている。

Mac-gowan – exile

J. Legge – elder レッグの注解 Mencius (孟子) から族長の説明が引かれている。

Williams – chop

Wade – tranship

Gutzlaff – good-will

15) ロブシャイトは『地理新誌』の「序」で、『地理全志』等の書を読んだことにふれ、自分が今この著を著すのはその不足とすところを補うためであると述べている。なお、「午線」や「海峡」はマーケスの『地理備考』にも出てくるが、他の用語との関連で考えると、直接には『地理全志』から来たと考えべきであろう。

16) ロブシャイトが英華字典の4分冊の中で訳語を変えていることを先に指摘したが、『英華』と『漢英』での変化は「太平洋」くらいである。ロブシャイトの『英華』が2000頁を越える巨冊であるのに対し、『漢英字典』はわずか592頁しかなく、五帯の名称でも「温帯」があるのみである。『漢英』の部にはつぎのような地理学用語が出てくる。

海濱 平原 地理図 土星 地球 軌道 山嶺 英倫 兪州 (continent) 経緯度 行星 定星 経星 極地 地気 天気 土気 気候 水土 沙漠 石油 洲 (eiland) 西洋 流星 港口 温泉 湾 焚臺 天球 地球 緯度 赤道 纏度 (orbit) (星辰) 軌道 海隅 (bay)

17) 中国洋学書における地理学用語の変遷については荒川1997, 7章を参照。

18) 「回帰線」は和製漢語で、成立は17世紀にさかのぼるが、日本でも定着はおそく、中国に入るのは20世紀に入ってからのことである。「回帰線」の日本での誕生から中国への伝播については荒川1997, 2~4章を参照。

19) 福沢諭吉の『増訂華英通語』（1860）には〈半島〉に「土股」という語をあて、「ハンシマ」というふりがなをつけている。あるいは当時このような読み方もあったのかもしれない。

20) 那須1997, p. 26. ロブシャイトがペリーについてきたというのは那須の『大日本古文書』の読み違いで、ロブシャイトがついてきたのは、ペリーが結んだ神奈川条約の批准書を交換にやってきたアダムス中佐であった（『ペリリ提督日本遠征記』補章）。アダムスは函館に向かうペリー一行と分かれ、太平洋を越えワシントンに向かい、条約が議会を通るのをまち、帰路大西洋経由で日本にもどってきた。ここから推理すれば、ロブシャイトは香港でアダムスに通訳として雇われたことになる。

なお、ロブシャイトが堀に送ったとおぼしき辞書のうち漢英の方は、つとに渡辺実によって静岡県立中央図書館葵文庫にあることが指摘されていた（大阪女子大学蔵『日本英学資料解題』）。遠藤智夫は英学史学会の例会において、堀が『英和对訳袖珍辞書』をつくる際、『和蘭字彙』以外に利用したとされる幻の英漢字典を追い求め、堀とメドハーストの英漢字典の訳語の比較を進めるとともに、先の葵文庫の漢英字典にある猷辞とサインをほぼ解説し、それがロブシャイトから堀に送られたものであることをつきとめていた（日本英学史学会第309回例会 1996/1/6, 同32回全国大会 1995/10/15, 同315回例会 1996/7/6 レジメ、ならびに遠藤1996）。那須雅之はこれを検証し一部訂正を行うとともに、函館図書館におもむき、堀の印のある英漢字典を発見、さらに堀孝彦（名古屋学院大学）によって発見されていたアメリカ、ペンシルバニアのレーハイ大学にある『袖珍辞書』がロブシャイトの手沢本であることを現地調査によって確認したという（第3回近代中国語研究会

- 1996/12/15, ならびに那須1996, 1997)。
- 21) 堀の辞書との関係では「雪崩」「昼夜平分線」も疑ってみる必要がある。「雪崩」は、諸橋『大漢和辞典』や中国の『漢語大詞典』に用例がなく、一方江戸期の主要な節用集の類にもみえないものであるし、「昼夜平分線」もロプシャイト以前の中国洋学書に出てこない。なお、節用集の検索には、亀井孝他『五本対照改編節用集』、中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』、『書言字考節用集研究並索引』を利用した。
- 22) たとえば『地理全志』の和刻本は安政5, 6年(1858-59), 『智環啓蒙塾課初歩』は慶応2年(1865), 『六合叢談』は文久年間, 『談天』『大美聯邦志略』は文久元年(1861)で、いずれもロプシャイト字典に先行する。
- 23) 〈貿易風〉の語史については荒川1997, 6章を参照。『博物新編』(1855)には「恒信風(貿易風は俗称)」と出ている。ロプシャイトが『地理新志』(1855)で使った「冷道」はホブソンの『博物新編』にも出ていたものである。墨海書館の『博物新編』の刊年は1855年であるが、英国図書館には1854年を明記する『博物新編三集』が存在し、その二集の初版たる『天文略論』は1849年に出ている。ホブソンの著もみていたというべきであろう。
- 24) 江戸日本の蘭学でも、paassat(貿易風)には「定向ノ風」「定リ(ノ)風」のような訳語しか出てこない。荒川1997, 6章を参照。
- 25) Other terms, such as 化学 which has been used for Chemistry, have been omitted on the simple ground that Chemistry is not a doctorin of transformation and that our present state of science forbids us to make use of the terms of the alchymisits of a darker age. (『漢英』の序文に「化学」が出ていることは那須雅之氏からの教示による) なお、Masini 1993, p. 52 (中訳本 p. 59) にも、西洋人たちが当初「化学」を使うことをためらった例としてロプシャイトの上記の序が紹介されている。
- 26) 八耳1996, p. 70-81。「化学」の初出については科学史の分野で長く論争があり、これまでは『六合叢談』(1857)を初出とするのが定説であった(坂出1970)。これを『格物探原』とするのは、その出版年を1856年とする潘吉星らの説にもとづくものであるが、『格物探原』がもともと『教会新報』に1872年から74年にかけて連載されたことを考えるとこの説はなりたたなくなる(劉広定1991)。八耳1995にあげる英国図書館、日本国会図書館等に蔵する『格物探原』はすべて光緒2年(1876)が初版となっている。筆者が蔵するものも光緒2年版である。

参考文献

- 荒川清秀 1987 「訳語「熱帯」の起源をめぐって」『日本語学』2月号 明治書院
1997 『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に——』白帝社
- 遠藤智夫 1996 「『英和对訳袖珍辞書』とメドハースト『英漢字典』——抽象語の訳語比較——A~H」『英学史研究』第29号
- 坂出祥伸 1970 「『六合叢談』にみえたる化学記事」『科学史研究』第93号
- 佐藤 亨 1980 「『職方外紀』の語彙とわが近代語彙との関連について」『文芸研究』95集
- 佐藤 亨 1983 『近世語彙の研究』桜風社
1986 『幕末明治初期語彙の研究』桜風社
- 永嶋大典 1970 『蘭和・英和辞書発達史』講談社
- 那須雅之 1995 「W. Lobscheid 小伝」愛知大学『文学論叢』第109輯
1997 「Lobscheid の《英華字典》について(1)」同上第114輯
- 森岡健二 1969 『近代語の成立 明治期語彙編』(改訂1991 明治書院)

- 八耳俊文 1995 「清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録」『化学史研究』第22巻第4号 化学史学会
- 八耳俊文 1996 『19世紀中期の中国における西洋人宣教師の科学啓蒙活動について』平成6年度科研費研究報告書
- 劉 広定 1991 「《格物探原》与韋廉臣的中文著作」『近代中国科技史論集』中央研究院近代史研究所 国立清華大学歴史研究所出版
- F. Masini (馬西尼) 1993 The Formation of Modern Chinese Lexicon and its Evolution Toward a National Language: The Period from 1840 to 1898, *Journal of Chinese Linguistics* 黄河清訳『現代漢語詞彙の形成——十九世紀漢語外来詞研究』漢語大詞典出版社

[付記] 本稿は1997年度の国語学会全国大会(1997/10/11 山形大学)で発表したレジメを大幅に改稿したものである。レジメの執筆は荒川1997の校正の時期と重なっていたため、荒川1997の草稿以後新たに得た知見を著書の方に入れることになってしまった。そのため、レジメ自身は内容をロブシャイトにしぼったものの、資料的には重なる部分が多く出、このレジメをさらに原稿化する予定は当初なかった。しかし、国語学界におけるロブシャイトの位置を問い直すのも意義があると考え、学会発表後さらに調査を行い、荒川1997を一部訂正する意味で書いたのが本稿である。学会発表前後に質問、コメントや励ましをいただいた徳川宗賢、田中章夫、野村雅昭、梶原滉太郎、遠藤智夫、宮田和子氏らにこの場を借りてお礼申し上げます。

Abstract

According to Liu Zhengtan 劉正焱 et al. (eds.), *Hanyu wailaici cidian* 漢語外来詞詞典, the geographical term *redai* 熱帶 ('tropics') is of Japanese origin. But if it is a Japanese loanword, it would more likely have been rendered as *shudai* 暑帯, and the use of the character *re* 熱 suggests that this term originated in a language, such as Chinese, that uses this character also with reference to climate. As a first step in substantiating these suspicions of mine, I ascertained the fact that the term *redai* is found in Lobscheid's *English and Chinese Dictionary* (1866-69). Next, I retraced the traditions of Chinese "Western learning" that were reflected in Lobscheid's dictionary and pointed out that the same term appears in embryonic form in the *Kunyu wanguo quantu* 坤輿万国全図 (1602) by the Jesuit missionary Matteo Ricci. (As a compound, *redai* appears for the first time in Ricci's *Qiankun tiyi* 乾坤体義.) But there remained the question of whether Lobscheid did in fact draw directly on the achievements of Ricci and his associates. In the present paper, again focussing on geographical terminology, I wish to consider the sources of Chinese equivalents in Lobscheid's dictionary.

The term *bandao* 半島 (J. hantō) appears not only in Lobscheid's dictionary but also in *A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* (1862) compiled by Hori Tatsunosuke 堀達之助, and it has been shown by Endo Tomoo 遠藤智夫 and Nasu Masayuki 那須雅之 that Lobscheid had contact with Hori. If it should prove to be the case that Lobscheid did consult Hori's dictionary and adopt some of its equivalents, this would overturn the widely held view that all Chinese compounds in Lobscheid's dictionary are of Chinese origin. I therefore wish to examine the degree to which Lobscheid's dictionary was influenced by *A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language*, and at the same time I shall also consider why Lobscheid did not use some already existing terms such as *huiguixian* 回帰線 ('tropics'), *maoyifeng* 貿易風 ('trade wind'), and *huaxue* 化学 ('chemistry').